ヘリオス・クリード/キッス・トゥ・ザ・ブレイン
HELIOS CREED/KISS TO THE BRAIN

1. XL-35
   XL-35
2. マウンテン・ミステリー
   MOUNTAIN MYSTERY
3. マラヴィア・ミレニウム
   MALAVIA MILLENIUM
4. アヌビス・ウォーパス
   ANUBIS WARPUS
5. フェデレーション
   THE FEDERATION
6. キッス・トゥ・ザ・ブレイン
   KISS TO THE BRAIN
7. スロウ・アウェイ・ザ・リンド
   THROW AWAY THE RIND
8. ネメシス
   MEMESIS
9. レッグズ
   LEGS
10. アシッド・レイン
    ACID RAIN
11. ザ・ウォーミング
    THE WARMING
12. ユア・スペースマン
    YOUR SPACEMAN

「ハイになった事があるかい？ 本当にスゴくハイに。何のイフェクト処理もしていない音楽を聴いてても、それがまるでイフェクトがかかりまくっているようになるくらいにね。そんな音を作りたいっていう衝動があるのさ。ハイになってない状態でもそんな具合に聴こえるような音をね……」

（ヘリオス・クリード/米 OPTION誌 NO.49）

本作『キッス・トゥ・ザ・ブレイン』は、ヘリオス・クリードの記念すべき国内初リリース作品であり、通算で6枚目にあたるアルバムである。アメリカのアンダーグラウンド・シーンに少々通じた人ならば、彼がかつてクロームのギタリストとして極めて個性的な音楽を創造、展開していた事を十分に承知していると思われるが、まずは初心者の為に、クロームそしてソロ転向後現在に至るまでのクリードの歩みを順を追って振り返ってみたい。

クロームは'76年サン・フランシスコにおいて、アート・スクール出身のダモン・エッジによって誕生した、非常にカルトなサイケデリック・ユニットである。同年、エレクトリック・ヴァイオリニスト、ゲイリー・スペインらとともに制作したアルバム『THE VISITATION』を自身のレーベルであるサイレンよりリリースしデビューを果たす。そして、スペインの紹介によって、当時19才のジャンキーだったクリードはエッジと出会う事になる。そして、意気投合したクリードはすぐさまバンドに加入する。

「音楽自体はそれほど大したものじゃなかったんだ。でも、イフェクトの処理の仕方が、抜群にカッコ良かったんだ。それで、バンドに入る事に決めたんだ」

当時を振り返ってクリードがこう語るように、『THE VISITATION』は'60年代のサイケデリック・サウンドの焼き直しといった印象が強い、どちらかといえば評価し難い作品であった。しかし、ブルー・チアーのギタリスト、リー・ステファンの発するギター・ノイズに多大な影響を受け、パンク／ヘヴィ・メタルの素養も持ち合わせたクリードの加入は、クロームを唯一無比の個性を持つ狂気のユニットへと急激に変貌させた。そして、それはセカンド・アルバム『ALIEN SOUNDTRACKS』という形となり、我々に衝撃をもたらした。

「ポルノ映画監督、ザ・ミッチェル・ブラザースの作品に対するサウンドトラックの作成」という目的のもとに手掛けられたこのアルバムは、悪意やいかがわしさがプンプンと臭い立つ、奇妙でどこかしらＳＦ的な感覚を漂わせた実にショッキングな内容であった。そして、その衝撃は続く'79年のサード・アルバム『HALF MACHINE LIP MOVES』でピークを迎える。彼らがここで見せた冷酷で凶暴そして非人間的なサウンドは、"サイケデリック・ミュージック"を新たな次元へと昇華させていったのだ。

およそ7、8年前、いわゆる"ジャンク"と呼ばれる音楽が、アメリカのアンダーグラウンド・シーンから新しい波として登場してきたが、壊れ方では群を抜き、ムーヴメントの主役ともいえるブッシー・ガロア、その中心人物であるジョン・スペンサーの様々なプロジェクトが生み出したサウンドの中に、この頃のクロームの影を見いだすのはさほど難しい事ではない。すなわち、彼らの特異性が高く評価される事は、同時にクロームの革新性をより明確に裏付ける事になるだろう。

その後クロームは『RED EXPOSURE（邦題：赤い露光）』('80)『BLOOD ON THE MOON』('81)『3RD FROM THE SUN』('82)『NO HUMNS ALLOWED』('82)と、次々と順調なペースでアルバムをリリースする。どの作品もクロームらしい悪意と狂気を内包した、高い完成度を持つものばかりだった。特にシングル・カットされた「Fire Bomb」や、元スワンズのテッド・パーソンズ率いるブロング、タッチ＆ゴーの看板スターであるジーザス・リザードといったアメリカ・オルタナティヴ・シーンの大物達がここ数年の間にこぞってカヴァーした「3rd From The Sun」などはクロームを代表する名曲といえるだろう。しかしながら、より洗練され整合されていく彼らのサウンドは、その引き換えにかつての衝撃を徐々に失っていく。そして、それはバンド自体のパワーを減ずる事でもあった。

「ダモン・エッジ、彼は全くロック・ミュージシャンとはいえなかった。というより、ミュージシャンですらなかったんだ。彼がやりたかったのは、もっと"アート"な事だったんだ。ただ、お互いがそれぞれのスタイルを発展させていくうちに俺はギター・イフェクトの中毒になっていて、彼はドラムとキーボードのイフェクト中毒になっていた。そして、俺達はお互いの中毒症状が気に入っていたのさ。

「多分、彼も俺と張り合う事で精神的にすごく疲れていたんだと思うよ」

こうして、少しずつ表面化しつつあった2人の間の亀裂は、クリードが望むライヴ活動にエッジが同意しなかったという理由によって、もはや修復不可能な状態にまで拡がってしまう。そして、フランスのモスキート・レーベルより'83年にリリースされた通算8枚目のアルバム『RAINING MILK』を最後に、クリードはクロームを脱退する。残ったエッジは翌年『INTO THE EYES OF THE ZOMBIE KING』を単独で作り上げるが、'85年のライヴ・アルバム『THE LYON CONCERT』のリリースを最後にクロームの活動に終止符を打つ。

しかしながらエッジは4枚のソロ・アルバムをリリースした後、'86年クロームの名前を復活させる。だが、乱発された作品のいずれをとっても、そこにはかつてクリードとともに作りだした独創的な音楽性は少しも感じられず、その存在の意義を問われる事となった。

一方、ソロ・アーティストとして第2の活動の幕を開けたクリードは'85年、バンドを率いてデビュー・アルバム『X-RATED FAIRY TALES』を地元サン・フランシスコのインディ、サブタレイニアよりリリースする。「歌を作る事に重点を置いた」というこのアルバムは、クローム時代に比べるとストレートなロック色が強く、改めてエッジとのベクトルの違いをはっきりと感じさせたが、作品としてはまだまだ未熟さが残るものであった。結局、このアルバムは大した評価も受けず、クリードはしばらく沈黙する事になる。

そんな彼が活動を再開し、注目を集める事になったのが'89年。巷ではサブ・ポップを中心とする"グランジ"の波がシーンを揺るがしていた。クリードはこの年サブタレイニアンからセカンド・アルバム『SUPERIOR CATHOLIC FINGER』（ただし、メンバーから判断するに、録音時期はやや古いようだが）と、現在のレーベルであり、サブ・ポップと並びアメリカ・オルタナティヴ・シーンを支えるアンフェタミン・レプタイルよりサード・アルバム『THE LAST LAUGH』の2枚を立て続けにリリースする。特に後者はプロデューサーにスキンヤードのギタリストで一連のグランジ／ギター・ジャンク・バンドに対するハードな音作りで人気を高めつつあったジャック・エンディーノを起用し話題を集めた。どちらの作品も、かつてのクロームの最大の魅力ともいえる奇妙なＳＦ感覚と暴力性に更に磨きをかけた内容であり、クリードの完全復帰を端的に物語っていた。

その後もクリードは、元レイプマンのドラマー、レイ・ウェイシャムを迎えた『BOXING THE CLOWN』('90)、シングル「The Warning」('91)『LACTATING PURPLE』('92)といった極めてクオリティーの高い作品をコンスタントにアンフェタミンからリリースする傍ら、スティーヴ・アルビニ、サーストン・ムーア、クレイマーなど現代を代表する個性派アーティスト26人によるインストゥルメンタル・ギターのオムニバス・アルバム『GUITARRORISTS』('90)、サブ・ポップのシングルス・クラブ・リリースの1タイトル「SMELLS LIKE SMOKED SAUSAGES」に各1曲を提供する。また、サブ・ポップからは'89年に1500枚限定の7インチ・シングル「Nothing Wrong」をリリース、更にはバットホール・サーファーズの新作、スキンヤードやドイツの新鋭ノー・ノー・イエス・ノーの作品に参加するなど、非常に精力的な活動を展開している。

さて、この『キッス・トゥ・ザ・ブレイン』である。のっけから断言してしまうと、このアルバムはヘリオス・クリードの16年に渡る音楽活動において文句無く最高傑作と呼べるものである。クロームでの音楽性を踏襲しつつも、さらに進化した、ハイパーリアルともいえる音の空間は、目眩を覚えるほどの強烈な刺激に満ちている。これまでは流動的だったメンバーも、前作よりポール・デラ・ベレ(Dr)、ポール・カーク(B)、Z・シルヴァー(Syn, Vo)、そしてクリード(Vo, G)の4人に定着。そのためか、このアルバムには以前とは違った安定感も感じられる。

逆回転されたテープ・ノイズ、強力なドラミング、イフェクトされ狂ったように響くギター音、そしてヴォイス・チェンジャーによって歪められた白痴的なヴォーカル。1曲目にしてクリードの世界は全開である。続く②はバットホール・サーファーズやミニストリーとの共通性を如実に感じさせる出来。そして、疾走感のあるヘヴィ・メタリックなギターが痛快な⑤⑦、ドライヴ感のある重低音が印象的な⑨と、すべての曲が彼の魅力を余す事なく伝えてくれる。ブッ飛びまくった歌詞も思わずニヤっとさせられる。彼のいう「ドラッグ無しのトリップ状態」に、間違いなくこのアルバムは導いてくれるのだ。そしてクリードの「中毒性のある周波は存在する」という持論に対しても、ぼくは身を持ってその正しさを証明できるだろう。中毒性のある周波、それはまさにクリードのノイズである。

密室性が強く、以前はなかなか情報が伝えられなかったクリード、そしてクロームだが、アンフェタミンからのヴィデオなどを通じて徐々にそのベールも剝がされつつあるようだ。間もなくヨーロッパでライヴ・アルバムのリリースもされるというし、今回の快挙ともいえる国内発売に次いで、来日公演が実現する事を切に願いたい。

蛇足だが、サンクス・クレジットされたプレッシャーヘッド（ただしくはPREASURE-HEDではなくPRESSUREHED）は、アメリカのゴシック系インディ、クレオパトラを中心に3枚のアルバムをリリースしているユニットで、その音作りは正しくクローム／クリードの流れを継承するものであり、クリードの魅力に取り付かれた方には、応用編として一聴を薦めたい。

'60年代を代表するドラッグ・カルチャーである"サイケデリック・ミュージック"。これを蘇生し再現しようと試みるアーティストは今もなお後を絶たない。しかし、その多くは音楽的な模倣にのみに終始し、自己満足に終わっているに過ぎない。'90年代の今、そんな"サイケデリック"の文脈をより創造的に進化させられるのは、ヘリオス・クリード、彼をおいて他にはいないだろう。

（1994.FEB.19TH 久保田稔人）

●HERIOS CREED SOLO DISCOGRAPHY

1. X-RATED FAIRY TALES
(SUBTERRANEAN/SUB 49) LP
2. SUPERIOR CATHORIC FINGER
(SUBTERRANEAN/SUB 62) LP
3. THE LAST LAUGH
(AMPHETAMINE REPTILE/ARR 89167-1) LP, CD
4. BOXING THE CLOWN
(AMPHETAMINE REPTILE/ARR 89195-2) LP, CD
5. LACTATING PURPLE
(AMPHETAMINE REPTILE/ARRCD 23/174) LP, CD
6. KISS TO THE BRAIN
(AMPHETAMINE REPTILE/AMREP 010) LP, CD
7. Nothing Wrong/The Sky
(SUB POP/SP30) 7″ LTD 1500
8. The Warming/Your Spaceman
(AMPHETAMINE REPTILE/SCALE 33) 7″
（※本ＣＤボーナストラック曲2曲）

今や"米インディ・シーンを代表する"なる、ある種陳腐な形容詞が全く酒落にならなくなってきたポスト・パンクのトップブランド「アンフェタミン・レプタイル・レコーズ」。その設立は7年程前に遡ります。大学進学を機にミネソタ州ミネアポリスの地を踏んだ学生トム・ヘイゼルマイヤー。ハスカー・ドゥ、リプレイスメンツ、ソウル・アサイラム等多くの有名バンドを輩出しインディ・ロックの都とも称されるこの町で、トムも音楽活動をスタートさせます。仲間2人を誘いバンド結成。その名も「蝿がぶんぶん（Halo of flies）」という多少スケールに欠けるものではありましたが、彼らの中に脈打つパンク・スピリット"自主独立"の精神は当然の様にもう一つの機構を生み出します。アンフェタミン・レプタイル、彼らのレコードを出す自主製作レーベルはトムが名付け親になりました。大手に売り込もうとか有力マネージャーにお願いしてとか、そういう気持ちは端から無かったのでしょう。バンド活動に関わる一切を自分達の手で賄う。そんな彼らの気概は黒く熱い結晶となって形作られていきます。1988年、デビュー7″「RUBBER ROOM」を限定200で出した後、それ程の間を置かずに2nd「SNAPPING BLACK」3rd「CIRCLING THE PILE」と彼らの姿勢を支持するファンの増加に伴いリリース数も伸びていきました。4枚目のシングル「RICHIES DOG」発表の頃には、友人バンド関係（スロウン・アップス、Uーメン）のリリースなど、いくつかの企画が持ち上がっていた中、4バンドが一曲ずつ持ち寄って一枚のシングルを作るというオムニバス7インチの構想は、相変わらず金の無いレーベルにとって安上がりで、リスナーに簡潔にレーベルの色を知ってもらえる好企画位の軽い気持ちで話は進み、外部1＋身内3バンドの曲を揃っていざリリース……アンフェタミンの歴史は実質ここから始まったといって過言ではないでしょう。「DOPE, GUNS, & FUCKING IN THE STREETS」シリーズはたちまちの内にファンの話題盤となり、売出中のマッドハニーのトラックが入っていた事も拍車をかけ、それまでに無いスピード記録で完売、引き続いてオフィスになだれ込んだご新規からのバックオーダーの嵐。全く予想だにし得ない反響の大きさに驚きながらも、トムはある確信をつかんだはずです。ファンは何かを求めている。より新しいもの、ありきたりなパンク、コアに変わる何かを。一足先にファンの耳目を集めていたサブ・ポップはポスト・パンクの行方をＭＣ５、ストゥージスの時代まで遡って提示した。僕らはハスカー、ソニック・ユース、ビッグ・ブラックの様な、よりオルタネイトで現代的な流れをレーベルの核にしよう。方針はすぐに「DOPE, GUNS,」シリーズに反映されました。バットホール系の異才ロンリー・モーンズ、アンビニの秘蔵っ子ターー、頭脳派ゴッド・バリーズ、さらに他レーベルからヘリオス・クリード、カウズ、サージェリーなどの大物を迎え、レーベルはその陣容を充実させていきます。これらアンレブ・バンドの生み出すサウンドは、どれも"ジャンク"と称せられた一連のムーヴメントを継承し得るノイジー＆アグレッシヴなギターを基調としながら、非常に個性的で独自色に溢れていました。ファンがこれ程の優秀なスタッフに反応しない訳もありません。アンレブのリリースするレコード群は内容、商売上の成功相まって各方面に衝撃を与え、アンダーグラウンド新時代の動向に明確な指針をもたらしたのです。'92年ヘルメットの大成功で巷にそれ風のハード・リフバンドが大挙出回りましたが、当のレーベル内では一つも出てこないところがアンレブらしさを物語っているようです。

（山本和弘）

TFCK-88680

TOY'S FACTORY 発売：株式会社トイズファクトリーレコード

取扱い上の御注意 ●鏡面が汚れた時は、やわらかい布（ガーゼ、ネル等）で軽く拭きとって下さい。●レーベル面には文字を書いたりキズを付けたりしないで下さい。●直射日光の当る所、高温多湿な場所には保管しないで下さい。

TFCK-88680

ＸＬ−35
ＸＬ−35
生きてるって最高だぜ
これってその辺のバカな薬とは違うんだ
脳ミソに影響しないしさ
ＸＬ−35
おまえのいるとこいつも一緒
ちっぽけな心に隠されてきた
ＸＬ−35

マウンテン・ミステリー
汽車は山を登る
時間通りに出発だ
神秘に満ちた不思議な山
トンネルを抜け
橋を渡り
カウボーイやインディアンが
山の尾根や
曲がり角に
エイリアンだ
あれは男じゃないぜ
この汽車は後戻りはしないんだ

マラヴィア・ミレニウム
新しい黄金時代に
この身で感じる時がある
マラヴィアという名のアンドロイド
なにか手伝うことはないかな
奴の名前はサイボーグ・サム
仕事は山のようにある
住みかは地下牢
サイボーグ・スーと同棲してるんだ
ある日サムとスーが
公園を歩いてると
マラヴィアってアンドロイドに会った
それで一緒に遊んだのさ

フェデレーション
俺たちは連邦政府
おまえの惑星をじっと見てる
雲の中をぬって
おまえの町に行くところだ

キッス・トゥ・ザ・ブレイン（パート１）
大地の奥深く埋もれた
埃っぽい墓の中から俺は出てきた
へびの抜けがら、馬、壊れたおもちゃ
そして気まずい音が
海の底に住むセイレン*に引きずりこまれたんだ
黴臭い耳に聞こえる
海の底から俺を引き込む妖しい声が
聞こえてきた

キッス・トゥ・ザ・ブレイン（パート２）
脳ミソにキス
空間を旅しながら
終わりも始まりもない
時空のねじれ
真空の中を飛び
空を横切る時がきた
俺の母親はオムツを取り替えて
泣かないようにあやす
切荷はここにあるんだ
さあ汽車に乗れよ
おまえの心は雲の中を漂う
これが脳ミソにキスってやつさ

スロウ・アウェイ・ザ・リンド
反対側を見るんじゃない
じゃなきゃおまえは死んじまう
奴らが俺たちをつかまえる前に
空から何がやってくるんだろう
俺たちがんばらなきゃ
そうしたほうがいいってわかってるだろ
コントロール不可能になりながら
俺も脳ミソゆさぶって
この痛みをおっぱらうんだ
果物みんな食って
皮は投げ捨てる
王様みたいに生きるんだ
何を見つけたとしても
俺は脳ミソゆさぶって
この痛みをおっぱらうのさ
おまえも一緒に
タガをはずそうぜ

ネメシス
おまえは水
おまえは夢
大海原の底の
海の底の
難破船のそばの

レッグズ
猛烈に色っぽいしなやかなストリップ
おまえのしたたる体いかしてるぜ
無限の世界を感じるんだ
俺の体におまえの足をからめてくれよ
きつーく締まったアンクル・ストラップ
６インチ・ヒールを履いてそびえ立つ
皮の匂い、ぎゅっと握りこまれて
おまえのご主人さまはトリップし始めてるぜ

ザ・ウォーミング
地球が温暖化したひにゃ
俺たちもう上には昇れない
警告してるぜ
生き残りたくたって
地球があったまっちまったら
もう朝なんかこないんだ

ユア・スペースマン
一人ぼっちで立ってる
おまえの心に入り込みたくて冗談かましてる
俺はいつだって
おまえのスペースマン
ちょっとのスペースでいいんだ
それで俺も落ち着ける
俺に役を割り当ててくれよ
俺はおまえのスペースマン

訳・AKIYAMA SISTERS, INC.

*SIREN(セイレン)
ギリシャ神話：半人半鳥の海の妖精　美声で船人等を
遭難死させる。

THE WARMING
There is no way that we get high
After the warming
This is warming
There is no way that you want to survive
After the warming
Could be some morning

YOUR SPACEMAN
Standing alone in time
I'm joking trying to fly across your mind
It's always
I'm your spaceman
I'm looking for a little space
To ease my mind
To cast me
I'm your spaceman

NOISE
AMPHETAMINE
REPTILE RECORDS